

51 島の制約

What_i did you buy *t*_i?のような疑問文をwh疑問文と呼び、疑問詞whatは元々buyの目的語の位置にあったものが文頭に移動したと考えられる。(tは痕跡(trace)と呼ばれ、疑問詞が元いた場所を表す。iは指標(index)と呼ばれ、iが*付いているwhatとtは同じものであることを表している。)

Wh移動は強力な操作ではほぼ全ての統語範疇(≒品詞)をwh句にして文頭に移動することが可能であるし、(1a)のように名詞句の一部を抜き出すことも、(1b)のように複数の節を超えて移動することも可能である。(但し、(1b)のwhatは様々な根拠から、文末から一足飛びに急行で文頭に移動するのではなく、途中のthatの前に各駅停車で立ち寄って文頭まで移動すると考えられている。これを**連続循環的移動(successive-cyclic movement)**と呼ぶ。)

(1) a. Who_i did you see [_{NP} a picture of *t*_i]?
b. What_i did you say [*t*_i that Mary believes [*t*_i that Tom bought *t*_i]]?

それでは、どんな場合でもwh移動は可能なのかと言うと、そうではなく、ある特定の環境ができると、そこから要素の抜き出し(=wh移動)が不可能になる。そのような環境のことをRoss(1967)は**島(island)**と呼び、島から要素の抜き出しが禁じられることを**島の制約(Island Constraint)**と呼んだ。例えば、(2a)は「ジョンが誰とキスをしたという噂を君は信じているの」、(2b)は「誰を侮辱した少年を君は知っているの」という、日本語では意味解釈が可能な文であるが、英語としては**非(文法的な)文(ungrammatical sentence)**である(文頭のアスタリスク(*)は非文を表す記号)。

(2) a. *Who_i do you believe [_{NP} the rumor [_S that John kissed *t*_i]]?
b. *Who_i do you know [_{NP} the boy [_S who insulted *t*_i]]?

つまり、これらの文の非文性は意味解釈のおかしさから来るものではなく、NP+Sという複雑な名詞句が生成されると**複合名詞句の島(Complex NP Island)**が形成され、そこからwhoは抜け出せなくなるということである。単に島というとわかりづらいが、孤島にwh句が取り残されればよい。つまり、このwh句は島の外へ抜け出していきたいのだが、この島には船もボートも存在しないので、出ていけないのである。

生成文法を専門としない人から見ると、「世の中に存在しない非文などを研究して何の意味があるのか」と思われがちだが、健康な人の身体の構造を解き明かすためには、病気の人の状態を研究して初めてわかることが多々あるのと同様、

非文を研究することがこの半世紀の統語論研究に多くの成果をもたらしてきたと言ってよい。

ここで島を形成するものと形成しないものの重要な特徴の一つを挙げると、以下の(3)のように言える。それを踏まえ、(4)、(5)の例を見てみよう。

- (3) 動詞と近い目的語(補部)は島にならないが、動詞から構造上遠い、主語(指定部)や副詞節(付加部)は島になる。

- (4) a. Who_i did you see [_{NP} a picture of _{t_i}] ? (目的語)

- b. *Who_i did [_{NP} a picture of _{t_i}] surprise you? (主語)

- (5) a. Who_i do you believe [that he insulted _{t_i}] ? (目的語節)

- b. *Who_i did Mary fire Tom [because he insulted _{t_i}] ? (副詞節)

すなわち、(4b)は「誰の写真が君を驚かせましたか」、(5b)は「トムが誰を侮辱したから、メアリーはトムをクビにしたのですか」という意図の英文であるが、それぞれ**主語の島 (Subject Island)**、**付加部の島 (Adjunct Island)** ができてしまうために非文だということになる。この他、等位構造制約、wh島の制約、左枝制約などの島が提案されたが、紙幅の関係上、割愛する。

しかし、重要なことはRoss式の島の制約のままでした島を羅列しているだけで、原理的、統一的説明とは言えないということである。それを踏まえ、Chomsky (1973, 1977b, 1981) の「境界理論」では概略、「一度の移動でNPとSの循環節点を2つ以上超えてはならない」という**下接の条件 (Subadjacency Condition)** が提案された。そうすると、例えば(2a, b)の複合名詞句制約はNPとSを2つ以上超えるので非文になるということである。主語の島や付加部の島も同様の説明が可能である。なお、(1b)はSを3つ超えていそうだが、各駅停車なので、一度の移動ではSは1回しか超えていない。

しかし、今度も「なぜ循環節点はNPとSなのか、他のXPの節点は循環節点とはならないのか」という疑問が生じてくる。この問題意識に立ってChomsky (1986) は「障壁理論」を提案し、概略、「一度の移動で**障壁 (barrier)** を2つ以上超えてはならない」と主張した。そして、障壁をNPとSのように固定するのではなく、全てのXPが障壁の候補となりうるとし、障壁の定義を相対化した。障壁理論は大きな前進ではあったが、問題点も複数残り、Lasnik and Saito (1992) が障壁理論の修正を図ったり、長谷川 (2003) が**複雑度の理論**を提案したりしている。また、現在の極小主義理論においても島の制約は重要なトピックであり、主語の島や付加部の島の研究が続けられている。

(野村 忠央)